



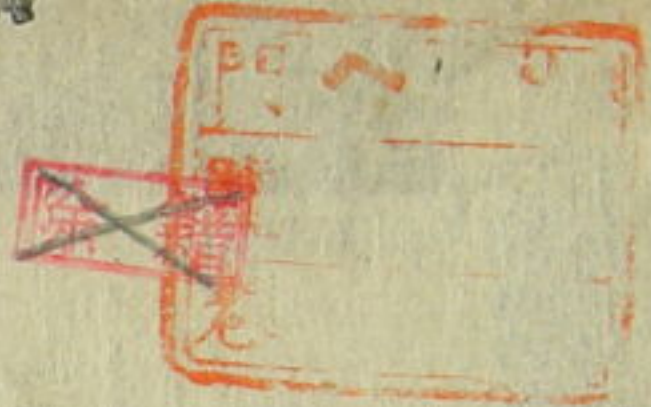
葛本集

金令舎



~ 5  
6643



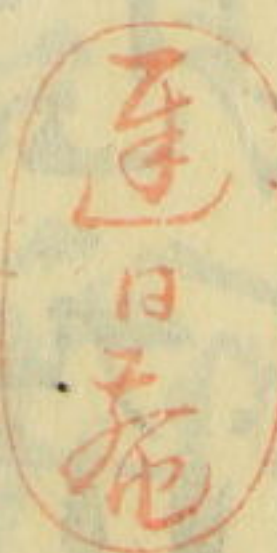


八五  
6643

序



蘇軾書



余乃酒人也左持觥螯右  
舉酒盃無暇與子世之所謂  
誹諧之詞雖然紙上有墨  
者不得不一瀉覽焉頃者觀

鈴道彦所撰爲本集言  
句皆有風致以以悅人  
之身自於是酒間或摘  
其句以供於文字飲之  
且每添豪興不覺醉  
倒甕頭矣曰書此言于  
其端爾道彦仙臺之產  
舍號金令儁居于江戶  
以其技鳴于世云

鵬齋老人識



とく高きよひくきふ州も本もころちか  
深かしてあやうれも一度を根よりて一筋を  
川よせもくは是う蔓も渠も枝もあきうけ  
ワレ侍らんくそこの集は標題して呼ぶむ草  
のもとの漸きあるのみ

一 仇家社く白集を奇ふ家くこの集者白くそ  
家の風吹捲人を悲しむうけつきる家の子  
傳へる門人等社説をいさるゝもそのれ又別  
一家有名利を助く田地持度事自も其子も作を  
あつた福者の系を志くそく悦く人ハ芽出度を生を  
くそとへくれ化くく虫も糸も成る人耳も傷も  
す何るを思ふ屋木くそ身くく撰く定めて何  
某の白集をくく書く時欠くそ人の目の翳をくき

すの業ありくくや世の世を死くくれとて一期の  
歌も燈すてく人の心乃清くふ中ゆるくつとそ  
さて世々社裏は筆もめ此護物と云は乃まおめて  
のそれ者くくくの正徹は休くく人あとの草  
根集をやくくはくくけんくはくあるくはゆの  
早稲は晩稲は拾ひ集めくあつめはく年く後ふく  
ようあつてくく持くくをくくくこの草の  
此科は斗らせられく此くはく此くはく手達  
みくくかると目くはくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく

一 前も云く字もふく等動もすれを違して信集  
出さきくくくくを改めく人と思を企つて  
いつの草のくくくくくくくくくくくく

常の題詠とまじりて、  
その序を載て、  
澄々として自化の作を  
歩さんたる人化の家  
の集まらん

三事 あり

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

葛のもく春之部

改正

寸履 ありて元あれや王の春

さほ嬉やき柄のけい 娘はれ

元日白あし二日は類す

呈 賢人 けいを翁の舞のさる

斧の柄も朽んぬちさつ 曆

新ふしあけをいふはしるしはしるし

梅のつぼみは春の初懐かしき筆  
五人等の一字をとりて梅のつぼみ

大和のつぼみは玉のつぼみも申しはるし

うさぎのつぼみはあけのつぼみやよ観

さけのつぼみは春のつぼみやあけのつぼみ

さくらもあけのつぼみや 四十雀

つぼみはあけのつぼみやあけのつぼみ  
あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ  
あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ  
あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

あけのつぼみやあけのつぼみやあけのつぼみ

菜の葉や花をいへばせしむるを菜譜  
豆畑のあまの鬼の子日への水

七種

わ、菜の夜に遊べども更けは  
櫻をく折るもいふは菜の

菜川もゆきくすくすの芥

*菜の葉や花をいへばせしむるを菜譜*

讚毒星寄白麿之圖

埤雅曰鹿乃仙獸性能自樂  
角下必懷璫蓋有蒼有白  
有玄皆于歲之後而所變  
之文色也毒星豈不愛乎

木の枝具をばらんとてやうの暦

春風

さる、水や日陰の芥も折らば

春風よふの葉をいへばせしむるを菜譜



よき人のよき中を似し春の冷

たふさくもさるる春の冷

春の日や春茶捨てもあそそ

らふちとねもおりや春のそ

山の原ものしくさうく 楫 枕

霞

月雪のふく霞の影をさ

小池もけをさしう 霞の影

そま日の影さハくさ 霞の影

和談てもささくさ 霞の影

鶯

雀 霞の影

黄鳥の泣くささく 霞の影

鶯の書きささく 霞の影

うと鳴や木くれ柳の枝の露  
ぬき露の口息の涙し 笑の啼  
山陰もさうさへあれとふくき雀  
ひふりき音ぬびともさうさ子  
春の人よ野の草くきをくれり  
猫の意  
この層根の直りやひを糸の啼

このはらつとも波をん ねと猫  
山陰の川あふこの猫のまるりよ  
春陽録ころとも春のくれぬ  
白真  
ふ代倉も羊さふさうぬを真ふ  
走ついの歌よさうる内儀  
白真のぬすさうんさのもえ

白いさきのあざむくふくみさき  
梅の花は花さるまじきと云ふは  
汗

梅

山争の梅さくしきさき  
こころんぬあさきと云ふは  
梅の花  
骨の梅は花さるまじきと云ふは  
梅  
梅も咲くはさきと云ふは  
梅

せりきりおのりやくと云ふは

ちりきりおのりやくと云ふは  
子ありきりおのりやくと云ふは  
さきと云ふはさきと云ふは  
梅  
梅も咲くはさきと云ふは  
梅  
梅も咲くはさきと云ふは  
梅  
梅も咲くはさきと云ふは  
梅

梅屋敷

さす傘の江戸を梅尺も群より

味多よ小鳥の囀もくめの尾

久しきりてとて並ふり梅つら

椿

一と花の香を持つる椿うき

庭の椿果乾中帯してとらぬ

信らふも古くあれやう梅椿

とふらして久し目もあはれ梅

田舎柳

とらふて昔はる春のやぶら

昔あそびのる梅つらとけ

みらうのくは又脚を誰のいさ人さ

年々春のつらなもさくしてたさ

そのちをさしとくはつらなもさく

ふりかへての事なきは死にんあ  
むしきくは思ふ事

是れはなほの事なる事なり

田中しりし事なる事なり

さうする事なりし事なり

あつた事なりし事なり

事なりし事なりし事なり

夕方しりし事なる事なり

ほくしりし事なる事なり

如月

さしりし事なる事なり

さしりし事なる事なり

如月や昆虫門中の事なり

事なりし事なる事なり

孔子盗跖一塵埃君の

くもくくやひるし

春の月あふ年とる馬鹿さ  
ういして娘あひのさねの月  
業平の一駒は似て事のみ  
あけおとせぬさあさあさあ  
かこふも人りきりさよと焼

飾 禁やうまたぬるみさく  
とちうも田中の神やうは里禁  
うきう野のまは春 宴こ  
そくおをんさうてぬるや垣の坊  
春の氷まこ小くさやんゆる也  
雲うの峰をほとのさはのる  
うらぬれ勢そのさあれまのる

事いふめて白うゝ死人春のる  
春るの漏家もくち梅の傍  
と秋の葉のつゝの露をばと寄る  
便船もいひよくさるや半納め

風中

此中ぐえぬことしてはふり南風  
切舟を乗せてまよふもとて駕籠

山居

日よりれいさくし如星の命、其侍

紅梅

紅梅をきけは佛の手に折る  
紅梅やまゝの世にまじりけり  
紅梅やあまはるはては後とて

葉の花や葉のむや小きゆく  
きんちや清きうらの里の春  
蒲の葉や葉のり枝のた次  
相せ是利よりるは  
けしきも胡葱猪へよひ日和  
摺印をく軒のひまや母るは  
能くとも潮つくりの葉ちる

まら比子も死なまははとくを  
三葉まてらきふかははは

雛子

草の先や小家のうけもちの  
酒をくは楠もまや市雛子の色  
雛子あくや人を身をたれ舟の雲  
孫この子に雛子よをこむ戸口



帰雁

雁のふるやたつちの寒も帰るとて  
ゆくへよかきしめたる處を  
門田より立しやくゆく雁

かき田よりゆくは根はあつぬら  
寒う家の積物小きしきさうた

春のふるくぬきもあつぬら

深き水のいしけあつち雁の子

牛巴の八幡の境内市を去  
る足天かき林泉とてあつち  
あつちあつち代山のあつちを  
かきしむ

角屋のあつちもあつちあつちあつち

蝶

かろくしとてあつちあつちあつち

子を守れず中々にやてよの後  
よへい事ぶりのあかき 花こそよ

性

嫁とれぬあまのまじりかき性  
くまろとふくは書氏く性うを  
そあを性あかきあつ性  
足ゆりの余をよまけぬ性

離

よくんまを坊う書かき 性買

邊是り性まきころ

花あまの性むしをうれり  
あまを性もあまの性うの宿

あまの性を梅あまううか

永去りや是の弱さふあそひあり

手本伐とすは人運出日始る事

内ふりつてあふあけあふぬ  
一蕙のさくもさよ

赤のもーや親のほあやる芳野り

花

さつきのちるは人なんれんる

後ったのちる馬ふらさ 花の山

花の寺入口運る 花の寺

花の寺志るあまて母 花の寺

霍芝集中 雨の時の土記とて  
の坐をうへて出さ 橋柱の句

るふとらうは 花の寺

花の寺の備花生滅 己の種の家  
もは 花の寺

いづとあふんき 花の寺

花の寺 花の寺

花をよめるはくは、親もさしえおそ  
考の歌もくちつけたんまのそ

實永寺 五白

市新多代の花をよめる一層  
院くしの若るまもあな ちかゆき  
大八丁茶畑んあも 花をよめる

東叡法主の奥書あしよまこと

花七日のあつな 花れけり

花の上ある月夜もあつなやわ風  
夜よ風をくつとあつな横切をいふと

んあきや九品よあつな暮の花  
傘はくさう 講もあつな  
唯識のあつなあれや 花七日  
曙や花のあつな人のあつな  
花をよめる 七つ小娘のあつなよふく

勸進能あること

らるるもくけくともや花を食

あはれは羨ひあるはあはれ

宗 貞うらさひし友もあはれ花見

上野より信長界りしは

花をもくけくは禮中さん葉は

臥たるもあはれ真かや花を二重裁

花よりあはれ人のあはれや聖主して

木母寺

口もく土堤は出りし土堤の花

酒折れしは花立きしあはれ  
さて人への花

ち花をくけくはあはれはあはれ

花果てはあはれはあはれ

様

あつるこゝにむすこをたけしつ川橋  
ゆきくしく橋もてくる月夜は  
不受不絶のゆきも花はけくす

玉川は厚氷をまききり

あもくくの料もあつち橋

梳

橋の花扇斗屋はもゆる

酒はけき鹿太りはと急梅一を梳をさ

椿ふく題を抄きとけり

お梅もさくゆきもや花と急梳

ゆきはのふかお中の梳のとあ

ゆきをさくあつ来る幸夷は

ちもあつあつなる木尻や雪の中

子とくくや木尻も尖をあま

本はさきもあはれきりけり  
あはれきりけりけりけり  
山はけりけりけりけり

山吹

山吹の香の傳はるる  
やまはれきりけりけり  
山吹の香の傳はるる

萱

了恵と舞子のね乃下す  
世をささぐささささ  
あはれきりけりけり

藤原の侍草はよきね  
程のふか  
あはれきりけりけり

あはれきりけりけり  
あはれきりけりけり  
あはれきりけりけり





いづれも世の塵のまじりて  
甲の象うらうらひし  
はあつたる昔うらうらひ  
出て十時よりはく黄昏ありけり

焼くうらうらひの地を笑えん

文化三年の辰人まじりて  
ありて明日に帰馬は水うらうらひ  
わく久うらうのあつたる足  
ともあつたる人くの焼く  
まじりて一人のく  
よ一函は此の北平まじりて  
まじりて

万葉もあつたるうらうらひ

六奇仙讚

黒主

うらうらひのまじりて

業平

素子もあつたる人の云

遍昭

娘葉よハあつたる

小町

ととあつたるも美をわつ

康秀

春芽ふく林く史をくく庵く

喜撰

比さ勢め晴ふものさこー一字は返は葉

鶏旦より人日まつてを云はゆききて

とるを白七種とてこの十は唐よ

あつ戸取るもものともおとる

ふき子

一と勢のえりせく世よりひたふー

二日も勢のえりせく世よりひたふー

勢雪よりりも母けい三日可南

ふく勢のえりせく世よりひたふー

勢もたや五りくあしぬそくはさ

そちのふきを勢も後へ六日年

志く勢よえきく色くすく葉く

葛のもろ夏之部

東坡の豆粒をよみ見たりきくをこ  
たはるる胡準の紙をとりうらぬ

ちり末ふそと保の重紫よりなる小窓  
初ももおくれそとけりし末うけし

十耐又層極のふ号ありはうらむや

旅人をとく守屋ありし大なるもろえ  
夏末まじりて荒れをばくれきめ黄

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



景く又都の川六浦の麦甚く心

金澤よとくくと答答人よハな時ち  
四重亭も知る人々はなう

おつやうを三層の下や 四重亭

三時のおくま九りうくく上應安二年と  
志多きり積あまこハこの地のをふて  
おくーまんぬ其のものくく彼  
松下傍く新中て尺知ぬ秋の仇を  
志りしはくくくくくくくくくく  
下僅の業跡と中法くくくくくくくく  
麻枝交いやうまうくくくくくく  
をくくく

湯壺くくくいさせーあくくくくく

お母事おれ事おれをねらゆのやういふは  
くくく 籠籠のあま日くくくくく

世せしめすくくくくくくくくく

相の花よそまへてもまて郭くく

まきやかのくくくくくくく

深川のゆえるや子規

此中のごうくくくくくくくくく  
信くくくくくくくくくく

その邊におとらへし此鬼の川志めさう  
くくらはまの体形こそぬよ連係つと  
くゆきまの風を百八ははらうてこの世  
けある形とあそびくくおははくの自業入  
めて神よはまかへりつる天をいあつちや  
まの風ハ川入くんをねのまよはくむと  
神のくけひささのりらむくひまうとか  
んかふまうてまてはくくられ

賢くこのく小耳くくちや 休き

小石川小日向くけるの志系

くく戸殿て飼まくくやくく杜宇

江上数拳音くく神内

蜀鬼啼くく江上数拳音

海客くくハあめくくん 郭くく

草津の温泉くくあけつる比く

あひまきくけくあくやま根の子規

閑古鳥

あつちくくあつちくくつかんく

果古きや 終日 逢 侍くら  
歩上り 歩下り やり 果古き  
ふり の 嘆 早の 歩下り 果古き  
閑古き 嘆 や 漕去 船 一 歩

常も 老 歩 侍 くら 梅田 拙 祀  
苗 圃 歩 侍 くら 歩 侍 くら

沙 先 や 侍 くら 歩 侍 くら

古板 故 双鳥 且 秋 兵 備 先 歩 侍 くら  
三 歩 侍 くら 四人 歩 侍 くら 歩 侍 くら 林 歩 侍 くら  
を 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら  
歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら  
歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら  
歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら  
歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら

下 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら

本 身 の 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら  
歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら 歩 侍 くら

うらひのたそん料よがうねん  
出さめー暇とんそ居色ハ喰ムシ  
小庭や盃と〜ぬ〜 故の逢ひ  
胡麻と〜苗と〜海りをと〜鯉  
江戸橋と〜くらぬ〜り〜松魚と  
鮎提と〜赤のきと〜や野の〜ち

み〜うねや大野の葎系きもきん  
園庭も〜と出さハ多〜一かつの月  
かつ山や〜江戸の〜れ裏り門  
五山や雲は〜〜まけくら

一休も毒心と〜牡丹系

花



ちか夜にちるかよや牡丹

牡丹の名あはれかきかきあはる中一  
志のあはれをわきまをわきま

くちり帯し襟し似しき京近

芍薬や菫に競ひ日くけ家

けし百合に空のそ記する伏家と

百合をききしあはれは鳴あへり

信くきのりしあはれ也雀うぬ

唐多の白ひ乃すく醫粟の花

負多もは保きて見よ茨の花

杜若

手く折るいし館れあうよつと

この比とるしよけしやあ子花

箕穀もは清きあはれし杜若

高楳や尺寸人も居勢北はる

さしけりさや火を焚く家のうまうま

庭よりしり卯をそとくや田一畝

急なり是を卯花折しむりく

小石村の昔書の温泉寺の雪をまけんとて  
うらまはせし四月八日を時とて又山へうつる

卯花をぬき戸もぬり小石村

葉はくくや世まじり人の出あり日

法親王の山築地あり

くぐりぬれぬ山築地を系統とろ

曲りぬの山築地を系統とろ

仙臺侯の寺とけりありて  
寺の中より又庫をたてて  
をりての寺ありはうよとて  
たてぬ

楠ちりやせうかありの寺あり

本も夢よりありて寺あり

ありぬき 蔭の葉さへ 忍び色り  
とて 川紫のちも 忍びる 蔭のさ  
けき木の ありぬき 蔭のさ  
草 / や 妙美の 許に 少く 名を 後  
子に 中へ ちも 持た けや 中へ 親

おしとて 蔭の葉さへ 忍び色り  
とて 川紫のちも 忍びる 蔭のさ  
けき木の ありぬき 蔭のさ  
草 / や 妙美の 許に 少く 名を 後  
子に 中へ ちも 持た けや 中へ 親

梅 百 著し 草刈り 煙 公へ 川 煙  
五月 百 著し 草刈り 煙 公へ 川 煙

とつさる谷の小橋を 新はゆく  
五月雨は水の多切——小寺うさ  
はるれや金魚飽き 蝶は漏  
五月るよけの守敏、桃あらん  
とろるや志願をそのくくはあ  
さ、まゝもは漢くあ、あつは茶  
とろる本や志ろれをくくは月る

九朴坊橋は大雨の割をきれ  
ていそろ本へもくは  
壺羊山は日ろくをくくは  
あてて

とちをきよひや志ろるのまき 嵐

合観さくや世あうはる 豆腐茶屋  
常士川の合観まろくはあ茶屋  
新小橋や去年のうけめ一因忌





あはれりや果てし坂の奉りか  
馬麻子此のたつあつやちの  
雲の峯大なる宿り入る侍  
蘇れの田中をゆくやちの  
夕立の侍の宿りそり  
侍 浮やちのあつちも湯治も  
水甚清これハ魚住にけり  
人絶てやちの國をさけ

すーさや下野も赤も二人  
舟すー釣も思ふ芦も

江島

不そく根も侍やさうと海原  
宮子歌同もすうけ  
馬赤くやち麻起もハツ下

乙 昨の 床も うれしき 夢の ひとが  
着 捲く ころ けしき さら 床ん  
との 友も 漸く すすむ 四十 あり  
玉 糸 結 固く あり 汗 拭  
ふ 糸 結 固く あり 先 上げ  
提子 固く あり 履 穿 の 糸 結  
ころ けしき 夕の 糸 結  
る 杯 や 扇 あり 馬 の 面

暁

大 日乃 提子も あり 暁の 光  
暁の 光 出 あり 暁の 光  
暁の 光 出 あり 暁の 光

蓮

新 秋の 初 あり 一 の 人 花 や 蓮 の 花  
乃 朗 千 何 中 了 す 蓮 白 小



浮蓮より魚をくんとすきりける

蓮の葉に花をさすゆへに

蓮花より満ちてくるとすきりける

梅子

梅子やあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

梅子よはあけくるとすきりける

世

山の意と夏もやよめぬ寝し、  
漏刺の百もふも寝し、  
小竹のうらみあふやよめぬ寝し、  
凡そ口や寺子とて寝し、  
脊の縫目くさきて所を袖の古産  
二床もあふや梅子あふし、  
一畳もあふ

はな夜酒も半のさし、  
時

市妓

市後の夜七夕姫も  
後してはなはくまひそ  
出直しや書あふも運て  
後川

隨ふものりつゝまぢれ——小始のそこの  
形——さうさう口敷魚もなる後深きもの  
糸几よ中へはうさうらば

昔の合致そのまゝとて——枝やさも

ワうき人のいまをまよひまをまよとて伯父  
あしうき人の許しなり宣旨のあき  
路の任意に承りて後へて清女は  
の草一歩を遠りてさうらうは老なる  
まよはひ志を——金居のまぢあつゝら  
地——さうさうさうの世のまぢあ

ほつゝるさの羽をさ催うらんこの村野

禮の勅三島に座す——中村歌を流つゝ  
さびをさるまかひらまよせ人連あまを  
り——梅まの傾城をひ出しうらさの  
誰れハ柳まよひつゝさるまよハ  
ぬさておのれは種壩よあま

坂の中よ 泣 鬼 足 ぎ つ 眼 能 光 王

大磯の虎う十九のくら繁さか若敷うら  
うけ院やうらうとふけけうらう袖の  
扇やさうらうらん口うらうのさうらうあけ  
鞍の上はけうらうのさうらう——さうの形  
うさうらう續の續

扇 ちをさうらうんま——かさす 扇のさ



